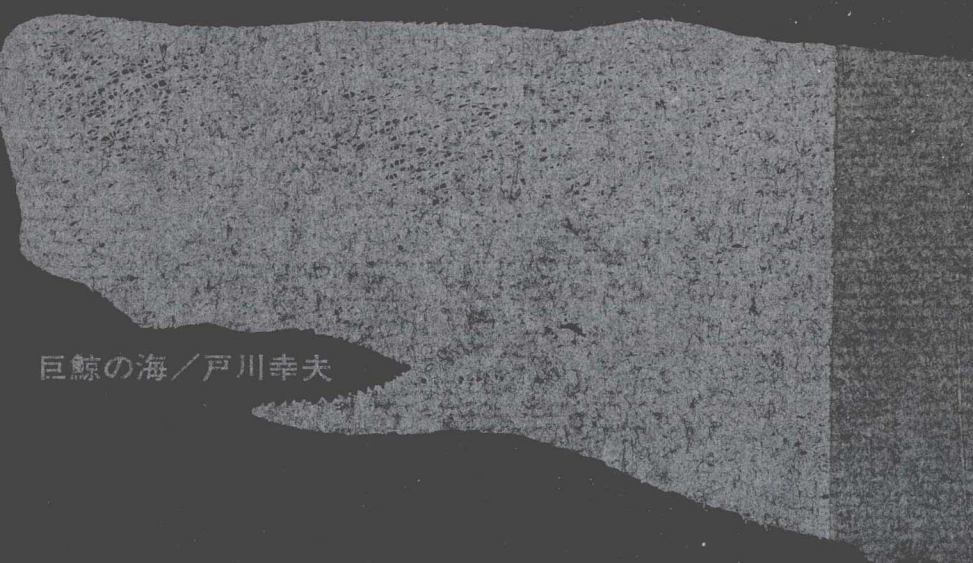




巨鯨の海／戸川幸夫

巨鯨の海／戸川幸夫／講談社



© 1969

YUKIO TOGAWA

第1刷 昭和44年10月8日

定価480円



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

巨鯨の海

著者 戸川幸夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

電話東京(942)1111

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

(分) 0-0-93 (製) 148047 (出) 2253 (0)

目次

怒れる海

五

三ツ星の誕生

二四

追跡者

四三

消えた母親

五三

愛の挫折

八

死闘の渦

二〇三

恐怖の雷鳴

二三

悶えと疼き

二四

自分との闘い

二五

ふしぎな娘

二七

海へ還る

二七

野獣との愛情

二六

装釘意匠

山藤章二

巨鯨の海

(一) 怒れる海

海は怒っていた。

激しい風は海の顔を逆なでにして、海神をひどく焦らだたせ、憤慨させていた。

大きなうねりや、小さなもり上りの頂からは烈風にひきちぎられた波しぶきが高く高く立ち上り、それが合流して白い煙幕となつて洋上を覆い、雲のように海面をかすめて飛び去つてゆく。一つの煙幕の後に、次の煙幕が続いて絶えることがない。

時には波しぶきは風の気まぐれに使噓しちやうされて大空に向つて挑みかかり、叩きつけてくる雨と闘った。

空は墨色で満されていた。しかし、息のつまりそうなその暗さの中にも明暗はあつて、濃淡の雲がおどろくほどの速さで東北に向つて流れていた。黒い雲、ねずみ色の雲、鉛色の雲、そしてぶきみないぶし銀の雲が入り混つて、先を争つて走りつづける。

ほのかに、希望をもたせる明るさが水平線にだけ残っていて、そこだけは白い線となつて天地の暗さを区切っていた。

白い線は、ただし平らな直線ではなかった。海面に腹ばおうとする雲の流れと、絶えず盛り上って大空に反抗の牙をむき出している波濤とによってぎざぎざの醜い線となっていた。

その醜い水平線をつくり出してゐるのは、よく見ると風や波のせいばかりではなかった。

いまこの嵐の海の中を大小無数の鯨の群が波濤に逆らつて東から西に移動してゐて、それたちが大うねりの上に飛び上り、背鰭や尾鰭をしきりとばたつかせていたからでもあった。

鯨たちは抹香鯨の大群で、北太平洋からまっすぐに南下してきて、この中部太平洋、くわしく言うならば東経百六十度、北緯三十二度の海域で右に方向を転換したところだった。

荒海に育つた鯨たちには吼える海も、叩きつける豪雨も烈風も、単なるレクリエーションの場ではなかった。

鯨たちは海の荒らさを楽しむかのように、躍り、跳ね、潜り、泳ぎ、そして嵐に負けない大きな鼻音をたてて潮を高く吹き上げていた。

こうした嵐の日には怖ろしい捕鯨船も、鯨の群も襲つてこないことを彼らはよく知っていた。だから底ぬけにふざけ合えるのだった。

波しぶきで、その数を読みとることはできなかったが、鯨たちはこの広い荒海一面にひろがって遊弋してゐる。それから察しても、三百や四百以上の大群であらうと思われた。

鯨たちは雑然とひろがって、思い思いに遊びたわむれてゐるように見えるが、そうでもなかった。彼らはいくつかのグループに分れていて、そのグループが集合して、この大群をつくり上げているのだった。

各グループには、それを率いる五十フィートを越す牡の鯨がいた。こうした牡鯨のことを人間たちはボスと呼んだ。

ボスがグループの者たちから信頼されるには勇者でなければならなかった。たしかに今この海域を遊弋しているボスたちは、その資格を充分に備えていた。彼の口のまわりにつけられた大烏賊の吸盤の痕跡——それは彼に捕えられて喰われようとする大烏賊の必死の抵抗を示すものであったが、それだとか鯨のためにつけられた皮膚の裂け傷、仲間の牡鯨との闘争の際の突き傷、これら幾多の傷痕が將軍の胸間に飾られた勲章のように、彼の戦功を誇っているのだった。

嵐は三日目にやんだ。そして久しぶりに真赤な夕陽が、まだ大きなうねりの余喘を残している海洋に、血のような滴りを落しながら沈もうとしていた。

そのころ鯨たちは、幾分、東に移動していたが、さして急ぐ旅でもないので悠々として浮遊していた。

いまは冬であった。だから抹香たちは寒い冬の間を南の温い海域で過そうとしていた。

春の足音が近づいてくると、彼らは本能の指示に従って、北回帰線沿いに南鳥島とマリアナ諸島に近づいてゆく。それからさらに琉球列島を目指し、そこから北に転針して日本列島につかかけ、日本の太平洋岸を北上して夏には金華山沖から北海道、千島列島の涼しい水域に遊ぶ——そうした回遊性をもった集団であった。

なぜ彼らがそうしたジプシーの旅を続けなければならないか？ それは水温が彼らの肉体に適

さないからだ、という理由ばかりではなかった。むしろそれよりも大きな理由は採餌の問題だった。

長須鯨や背美鯨のような鬚鯨類はアミのような小さな甲殻類を食餌としており、抹香のような齒鯨は烏賊や章魚などの軟体動物を好んで食べたから、彼らの移動はこれらの餌の移動と重大な関係があった。

海流は一定の水温を保って、広い海の中を川のように流れてゆく。海は一見平均してなだらかなように見えても、そこには人間の眼で捉えることのできないさまざまな変化があって、平均値を出しているのではなかった。従って生物たちは自分に適した水温——つまり海流のつて生活しなければならぬ。烏賊たちも大自然が与えた掟を破ることはできない。鯨だってそうだった。

移動する軟体動物を追って抹香たちも移動する。そのコースは一年かかって一つの環を完成させた。この環を人間たちは回遊圏と呼び、その中に含まれる海域をテリトリイ（領域）と呼んだ。

世界の鯨学者たちは広い太平洋の中にはこうした抹香鯨のテリトリイが少なくとも五つは存在していると言っている。

果して五つのテリトリイがあるのか、その当否は別としても、確かにいまここに遊弋している抹香鯨たちは未だかつて国際日付変更線を越えて東のハワイ諸島へは近づこうとしなかった。それと同じように赤道を越えて南太平洋に侵入しようとしなかった。それは海流が創り出したテ

リトリイと言えるかもしれない。

テリトリイの向うにはまた別のグループのテリトリイがあつて、互いに牽制しあつていたが、犯しもしないかわりに犯されもしないといった掟を厳然と守つていた。しかも、それは人間の世界と同様に、勢力の均衡が保たれている間の見せかけの平和であつて、一度なにかの理由で——たとえば鯨や捕鯨船の襲撃で——一方の群の勢力が著しく崩れた場合にはたちまちに侵略が行なわれるのだつた。猛々しい野性の世界では、力の侵略や支配は、生き榮えてゆくという自然の法則に従つてゐるのだから正義であり、道徳であつた。

さて——この抹香鯨の大群は、天候がおさまつて視界が利くようになってみると想像したよりもはるかに強大なものであつた。群の数は六百頭に達してゐるであらう。夕焼けの海のいたるところで鯨たちの水煙が勇ましく立ち上つてゐた。

鯨の潮吹きといわれるこの現象は、彼らが海水を飲みこんで吐きだすためではなく、また彼らの息が寒冷な大氣にあつて生ずるものでもない。鯨たちが頭の上に持つ鼻孔のくぼみに入りこんだ海水が、強力な排氣によつて霧吹き状態となつて噴出されるものであつた。鯨たちの鼻孔は、種類によつてそれぞれ形や大きさや角度が異つてゐる。従つて高く立ちのぼる「潮」にも種類によつて形や大きさや、角度が違つてゐた。あるものは頭上にまっ直ぐ立ちのぼり、あるものは前傾した。一本のものもあれば、頂上で噴水のように二つに分れるものもあつた。殆ど潮吹き of 現象を示さないものもあつた。

落陽は、大きくふくらみ、まさに沈もうとして赤い光を投げかけていた。その光をうけて抹香

鯨たちが斜め前方四十五度の角度に吹き上げる「潮」は、あかあかと反射して、火を噴いているように美しかった。

抹香鯨たちの大群が遊弋しているこの海域はアメリカから日本への定期航路にあたっていて、はるか彼方の、もう紺色に暗くなりかかった水平線のあたりに一筋の煤煙が見えはじめた。

その船は船体を白く塗った美しいアメリカの客船で大勢の客が乗っていた。船体も、鯨の潮と同じように夕陽をはねかえして、ピンク色に輝いていた。

上甲板でデッキゴルフを楽しんでいたアメリカ人のグループの一人が、自分の順番を待つ間に眼を細めて落陽の海面を眺めていたが、ふっと気づいて

「おい、あれは何だ？」

と仲間呼びかけた。とんきょうに聞える彼の叫びに、ほかの連中もゲームを捨ててびっくりして集ってきた。

「ほら、あの太陽が沈んでゆく辺りだが……」

青年が指さす海面は、湯が沸き立っているように赤い水煙が林立している。

「鯨のようよ……」

と若い婦人客が、青年の腕に頬を寄せて言った。

「まさか……」

青年には、常識で考えられないことだったらしい。

「あんなに鯨が集ってるなんて……」

「だって鯨以外に考えられないわ。海底噴火ならあんなに穏かじゃないでしょう。イルカとも違うわ」

二人とも自説をまげずに言い合った。言い合いながらも二人の間には特別に親しげな感情が溢れていたから、他の連中にもにやにや笑いをうかべて敢てとめようとしなかった。

「ねえ君たち、船長にたずねるのが早道だよ」

グループの一人が口を挟んだので、二人はそうすることにして船長室に続く操舵室への階段をかけ登っていった。

操舵室では肥った船長が特大の双眼鏡を眼にあててじっと前方を睨んでいるところだった。

彼は息を切らせて入ってきた若い二人の一等船客にちょっとびっくりした様子だったが、すぐに一流客船の船長としての威厳と愛想とをとり戻して

「何の御用でしょうか？」

と微笑でたずねた。

「失礼します。船長さん、向うの水平線のところにたくさん何か泳いでいるようですけど……鯨ですわね」

「海豚いづかでしょう？」

二人は同時に質問した。船長は双眼鏡を婦人客に手渡しながら

「まあこれで見てください。すばらしいショウですよ」

双眼鏡を眼にあてた娘は

「おう……」

と言っただけで声を呑んだ。初めて見る確かにすばらしい鯨群。彼女は自分が賭に勝ったのだという喜びを感じる前に、その景観に魅了されて茫然となつてしまった。

「どう……やはり鯨？」

青年はのぞきこんだが、娘は答えない。答えることも忘れていた。

「鯨ですよ、抹香鯨の大群です。抹香鯨の群では二、三十頭というのが普通で、稀に百頭ぐらい一緒になっているのを見ることはありますが、しかしこんなにかたまつて居るのは私の永い船乗り生活の中でも初めてのことでですよ」

船長が代つて答えた。

「どれ、貸してごらん」

賭に負けた青年は、もどかしげに娘から双眼鏡をうけとつて、一目みて、ひゃあッ！と叫び声を挙げた。

「こいつあ、凄いいッ。これだけでこの船に乗った甲斐があつた。

グレイス、僕は写してくるからね」

青年は双眼鏡を返すと勢よく飛び出して行つた。

「たしかにこのすばらしい景観はカメラにおさめる価値は充分にあります。だけど美しいお嬢さんを置いてき放りにするには小さすぎると思ふんですがね」

船長は娘に同情してユーモラスな口調で言つた。だが娘はむしろそれを誇らしげに

「いいえ、彼はカメラマンですの……。U・S通信社のビヤードという名をお聞きになったことありません？」

船長はややたじたとして

「そうですか……。それなら当然ですな。失礼だがお二人は……」

「来月日本で結婚するんです。両親が東京に居ますので……」

「そうですか……。いや、それはお目出とう。それならば幸福の門出のお祝いにあの鯨の写真の傑作が生れるように協力しなければなりません」

船長はにつこり笑ってフルスピードで鯨群に追いつくように命令した。



春であつた。だがオホーツク海の春はまだ浅い。

半月ほど前まで海岸線に、びっしりと張りつめていた流水は、ようやく今までしがみついていた手を放して、沖合はるかに去っていったとはいえ、流水そのものが溶け去ったのではなかった。流水の群は長い長い帯となつてどす黒いオホーツク海を北から南に向つてゆっくりと流れているのだった。

氷盤の上には海馬や海豹あざわしが乗ってかすれたような奇妙な吼え声を挙げている。

小型捕鯨船の第一朔風丸きくふうまるはその氷帯に沿つて南下していた。正面には、まだ厚く雪に閉された知床半島の山々が、いぶし銀のように光っている。

機関長の房太郎は後甲板の炊事場に来てストーブの火の具合をちょいとのぞいてから

「政吉い、そろそろ飯の支度しろや」

と怒鳴った。「御飯焚きさん」と呼ばれる政吉は、船員部屋の暗い狭くろしい寝台の上に毛布にくるまっていたが、再三呼びかける房太郎の声にチュッと舌うちして

「うるせえなあ、年中、鯭みてえに腹すかしてけつかる」

と悪態をついたものの、のっそりと起上って天井板をはね上げた。船員部屋の上は溜り場になっていて、寒い時だの雨や雪の日には船員たちはここにしゃがみこんで飯を喰うことにしている。

ぬっと顔を出した政吉に、房太郎は

「飯だよ……鯨がさっぱり現われねえもんで腹ばかり減って仕方がねえや」

と、吐きだすように言った。

鯨が出ねえのをまるで俺のせいのように言いやる——と政吉は腹の中でぼやいたが、相手が機関長とあつては正面きつて言いもならず、はい……と氣のない返事で、ズボンを引き上げて上ってきた。

外はストーブの熱のこもった船員部屋とちがつて身を切るように冷たかった。

政吉は思わずぶると身ぶるいして大きくさめを立て続けた。

第一朔風丸は四十トンほどの小さな木造捕鯨船なので、船長であり、同時に船主でもある耕造を加えて七人しか乗り組んでいない。砲手の由三、砲手見習いの鉄五郎、見張りの弥作と友造そ